

韓国語の母音 \emptyset の音色の地域差について

—小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載資料を活用して—

岩井亮雄

キーワード：韓国語（朝鮮語） 母音 \emptyset 地域差・方言差 小倉進平 言語地図

要旨

本稿の目的は小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載資料を積極的に活用して当時の韓国語母音 \emptyset の音色の地域差を詳らかにするところにある。中世語で oi (ㅝ) の綴字である調査項目を中心に母音 \emptyset の音色の地域差の全体像に迫った。本研究を通じて過去の方言資料の積極的な活用法の一例を示す*。

1 はじめに

韓国語の母音 oi (ㅝ) は中世語では二重母音 oi または oj であったとみるのが通説であり、現代語諸方言では主に単母音 \emptyset や二重母音 we で発音される¹。20 世紀初頭の oi (ㅝ) の音色について小倉進平 (1931:147) は「此의 (ㅝ) 音は地域によつては発音が困難で, 위 (we)・외 (we)・애 (e)・에 (e) 其の他に転訛することが稀でない」といい、この記述から当時の oi (ㅝ) の音色の地域差を窺い知ることができる²。20 世紀初頭の oi (ㅝ) の音色とその地域差を考察することは oi (ㅝ) の中世語から現代語への音変化を考えるうえで意義があり、韓国語の母音体系の問題とも関わる有意義な課題である。本稿は福井玲 (2016) が指摘するように小倉進平著『朝鮮語方言の研究³』所載資料が後進の研究者によって十分に活用されていないことを顧みてこの方言資料を積極的に活用して当時の \emptyset の音色の地域差の全体像に迫ることを目標とする⁴。

本論に入る前に 20 世紀初頭の oi (ㅝ) の音色の方言差を分析した先行研究を紹介する。Jo, A-ram (2014) は 1928–1943 年に発表されたレコードを用いて歌手の出身地に着目して当時の oi (ㅝ) の音色を分析し、全国的に見て二重母音 we が優勢であるが、東北地域出身者では we に次いで単母音 \emptyset も優勢（全体の 4 分の 1 程度）であり、変種として西北地域で \emptyset , e, i が、

* 投稿後、2017 年 5 月 27 日に東京大学本郷キャンパスで行なわれた第 253 回朝鮮語研究会にて投稿論文の内容の一部に基づき口頭発表を行なった。質疑応答にて貴重なご意見をくださった参加者の方々に感謝申し上げる。また、中世語の声調などに関する有益なご指摘をくださった査読者の方にも感謝申し上げます。

¹ 本稿では oi (ㅝ) のように括弧内にハングル文字を示す場合の oi などはハングル文字のローマ字転写を表し、 \emptyset や we のように後ろにハングル文字を示さない場合は母音の音色（発音や聴音）を表す。

² 本稿では単母音 \emptyset の変異音や地域差・方言差による音価の違いを音色という。

³ 上下 2 巻、1944 年、岩波書店。

⁴ 小倉進平の方言資料は主に 1911 年から約 20 年に渡り記録されたもので、被調査者は原則として普通学校の男女生徒約 10 名である（小倉進平 (1944 下: 8–13) による）。

東北地域で e が、西南地域で ø, e が、東南地域で wi, e, o, y が現れることを示した。鄭仁浩 (2013) は『韓国方言資料集⁵⁾』と『朝鮮語方言の研究』を用いて soi (쇠: 鉄・金) と pe (베: 麻布) の言語地図を描いて母音の地理的分布を示し、既存の論考を参照して oi-a (외아) 連鎖の発音の地域差にも言及し、方言分化の様相を等語線によって示した。Choe, Seong-gyu (2013) は『韓国方言資料集』や『朝鮮語方言の研究』などを活用し、oi (외: 外), oin-son (왼손: 左手), soi (쇠: 鉄・金), ko-ki (고기: 肉魚) の言語地図を描いて音変化やその地域差を考察した。本稿の議論は鄭仁浩 (2013) や Choe, Seong-gyu (2013) と部分的に重なるが、本稿は小倉進平 (1944 上) で朝鮮半島全道、もしくはそれより 1 道少ない 7 道に渡って調査された項目から ø の音色を検討するのに相応しいと考えられる項目を、中世語の声調が上声である項目や前舌母音化や jo の変種として ø が記録される項目も含んで網羅的に扱い、それぞれの項目の言語地図を描いて考察した点において両研究とは一線を隔する⁶⁾。

2 oi (외) の音色の地域的特徴

小倉進平 (1944 上) の調査項目のうち、朝鮮半島の全道⁷⁾、またはそれより 1 道少ない 7 道に渡って調査されている項目は 200 余りある (福井玲 (2016) による)。この 200 語余りのうち、ø を含む語形が 1 語以上ある調査項目は 40 余りある。具体的には以下のようなものである⁸⁾。

- | | |
|--|--|
| (1) 雹 mu-rø: 咸南 (1 地点) | (7) 舌 sø: 慶北 (1 地点) |
| (2) 山・墓 mø: 全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・平南, mø-ʔoŋ: 全北 (2 地点) | (8) 学校 hak-kø: 全南・全北・忠北・江原・黄海・咸南・咸北 |
| (3) 角 (かど) mo-tʰøŋ-i: 京畿 (1 地点)・咸南 (9 地点) | (9) ポケット kø-bi: 全南 (9 地点)・全北 (7 地点) |
| (4) 外 ø: 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・咸北・平南・平北 | (10) 麻製の鞋 tʰø-sin: 咸南 (3 地点) |
| (5) 男子・男児 si-na-dʒø: 咸南 (5 地点) | (11) 麻布 pø: 黄海・咸南・咸北 |
| (6) 兎唇の人 ʒt-tʰøŋ-i: 平北 (4 地点) | (12) 木靴 (式典用) sø-dʒa: 咸北 (6 地点) |
| | (13) 肉魚 kø-gi: 全南・全北・忠南・忠北・京畿・黄海・咸南・咸北 |

⁵⁾ 全 9 巻, 1987-1995 年, 韓国精神文化院。

⁶⁾ 地域差・方言差を検討したものではないが、中部方言を反映している音声資料を用いて ø の音色を調査した論考もある (韓成愚 2005, 金鳳國 2006, 車載銀 2007)。これらによれば 1935 年に録音された『普通学校朝鮮語読本』の音盤では oi (외) の発音には単母音 ø や二重母音 we が共存する。ただし、韓成愚 (2005) は単母音の方が優勢であると観察し、金鳳國 (2006) と車載銀 (2007) は二重母音の方が優勢であると観察する。車載銀 (2007) は 1934-1935 年に発行された「金福鎮の童話口演資料」も観察し、語頭では二重母音 we が実現する場合が多く、語中では w が脱落した例が頻繁に確認されると報告する。

⁷⁾ 当時の行政区分に従う。本稿では済州島は全羅南道に含めず済州と別に記し、全羅南(北)道を全南(全北)、慶尚南(北)道を慶南(慶北)、忠清南(北)道を忠南(忠北)、京畿道を京畿、江原道を江原、黄海道を黄海、咸鏡南(北)道を咸南(咸北)、平安南(北)道を平南(平北)と略記する。

⁸⁾ 「麻疹」には ø を含む語形はないが、語形の注記として [tø-jøk] や [tø-jo-gi] の轉という説明がある。本稿での語形の表記は ü (上点つきの u) を i に、' を ʰ (上付きの h) に置換した以外は小倉進平 (1944) に従う。

- (14) 焼酎 sɔ-dʒu : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・黄海
 黄海・咸南・咸北・平南・平北
- (15) 欵 kɔŋ-i : 全南 (2 地点)
- (16) 篩 (目の小さい) tʃø : 忠南 (1 地点)
- (17) 李の実 nɔŋ-i : 咸南 (3 地点)
- (18) 甘藷 tɔkam-dʒɛ : 平南 (1 地点) ・平北 (1 地点)
- (19) 蕎麦 mɔ-mul : 京畿 (1 地点) ・咸南 (2 地点), mɔ-mil : 京畿・黄海・咸南, mɔ:l : 咸南 (2 地点)
- (20) 黄瓜 (きうり) ø : 全南・全北・忠南・忠北・江原・咸南
- (21) 稲 pø : 黄海 (2 地点)
- (22) 鐵・金 (かね) sɔ : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・平南, sɔ-ʔkop : 江原 (2 地点)
- (23) 馬槽 sɔ-tʃɔŋ : 江原 (1 地点)
- (24) 糊刷毛 kɔ-al : 全北 (3 地点), kɔ-wal : 全北 (1 地点)
- (25) 斧 tɔ-gi : 江原 (1 地点)
- (26) 木枕 tʃø-tʃi-mi : 全南 (2 地点) ・全北 (3 地点)
- (27) 水汲み杓 pak-sɔ-gi : 全南 (3 地点)
- (28) 綿繰車 ʔpø-a-gi : 江原 (1 地点)
- (29) 抽斗 ʔpø-bø : 咸南 (2 地点), ʔpø-bi : 咸南 (8 地点)
- (30) 票 pʃø : 全南・全北・忠南・忠北・江原・
- (31) 氷滑り ɔ-rim nɔ : 咸南 (1 地点), kan-pʃaŋ nɔ : 咸南 (2 地点), sɔn-bɛ nɔ : 咸南 (1 地点), sɔl-ma nɔ : 咸南 (1 地点), sɔl-mɛ nɔ : 咸南 (1 地点)
- (32) 鳥の餌 mɔ : 江原 (2 地点), mɔŋ-i : 咸南 (3 地点)
- (33) 雲雀 nɔ-dʒo-ri : 咸南 (8 地点)
- (34) 猫 kɔ : 全南 (3 地点), kɔ-dɛ-gi : 全南 (1 地点), kɔ-de-gi : 全南 (1 地点), kɔŋ-i : 全南 (2 地点)
- (35) 蟹 (たてがみ) ʔkɔ-pʃi : 全北 (2 地点)
- (36) 瘦せる ø-da : 忠北 (2 地点)
- (37) 誦んずる øn-da : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・黄海・咸南, ø-un-da : 江原 (3 地点)
- (38) 却って ø-rjɔ : 京畿 (1 地点), tɔ-ro : 全北・忠南・忠北・江原, tɔ-ru : 咸南 (3 地点), tɔ-rja : 京畿 (1 地点), tɔ-rjɔ : 全南・京畿・江原, tɔp-te : 全南・全北・忠南・忠北・江原, tɔp-tii : 全南 (1 地点) ・全北 (2 地点), tɔp-si : 全北 (1 地点), tɔ-bi : 咸南 (8 地点)
- (39) 尖れるさま pø-ʔʃok : 全南 (7 地点) ・全北 (8 地点), ʔpø-dʒok : 咸南・平南・平北, ʔpø-dʒuk : 咸南 (5 地点)
- (40) 回答 hɔ-dap : 全南・全北・慶北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・咸北・平南

以下では ø と関連のある語形が全道、もしくはそれより 1 道少ない 7 道に渡って調査されている 12 項目を、(i) 中世語において文字 oi (ㅍㅌ) を含む 7 項目、(ii) 前舌母音化によって ø を含む 3 項目、(iii) jo の変種として ø を含む 2 項目に場合分けして考察する⁹。ただし、散発的な音変化により ø が現れたと考えられる場合は除く。また、考察対象の項目の母音の音色に関する言語地図を作成し、論末に附す¹⁰。

⁹ ø の出現環境が語頭位置である場合が多いのは、既によく知られているように、非語頭で o > u の変化を経たことによると考えられる。

¹⁰ 言語地図化の作業には言語地図作成用ソフトウェア Seal 8.0 を用いた。このソフトウェアはもともと福嶋秩子先生・福嶋祐介先生夫妻が開発されたものを福井玲先生が『朝鮮語方言の研究』所載資料の地図化のために改良されたものであり、以下のウェブページからダウンロードすることができるようになる予定である：<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/OguraProject.html> (2017 年 7 月 20 日現在)。

2.1 中世語で文字 oi (𐰜) を含む調査項目

本節では「外」「鐵・金」「誦んずる」「回答」「麻布」「山・墓」「黄瓜」の7項目を考察する。「麻布」「山・墓」は頭子音が両唇音であること、「外」「山・墓」「黄瓜」は中世語では声調が上声であったことが特徴である。

(1) 外¹¹

小倉進平(1944 上:54-55)には7種の語形が記録される。これらは \emptyset とその変種 (e, ϵ , i, we, we, ui (=wi)) から成る。地理的分布を整理すると以下のとおりである。

\emptyset : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・咸北・平南・平北	i : 慶南・慶北
e : 全南・慶南・忠南・忠北・江原・黄海・咸北	we : 濟州・全南・慶南・慶北・忠南・忠北・京畿・江原・咸南・咸北
ϵ : 慶南・慶北・咸南・咸北・平南	we ϵ : 慶南・慶北・咸北・平北
	wi : 慶南・慶北

地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州 : we	慶北 : ϵ , i, we, we ϵ , wi	江原 : \emptyset , e, we	平南 : \emptyset , ϵ
全南 : \emptyset , e, we	忠南 : \emptyset , e, we	黄海 : \emptyset , e	平北 : \emptyset , we ϵ
全北 : \emptyset	忠北 : \emptyset , e, we	咸南 : \emptyset , ϵ , we	
慶南 : e, ϵ , i, we, we ϵ , wi	京畿 : \emptyset , we	咸北 : \emptyset , e, ϵ , we, we	

(2) 鐵・金 (かね)¹²

小倉進平(1944 上:221-222)には16種の語形が記録される。これらは s \emptyset 系 (s \emptyset , se, se ϵ , si, swe, swe ϵ), 頭子音が濃音の ?s \emptyset 系 (?se, ?se ϵ , ?si, ?swe, ?swe ϵ , ?sui (= ?swi)), 複合語の s \emptyset -?kop系 (s \emptyset -?kop, swe-?kop, swe-?kot, swe-?kat) に分類できる。第1音節の地理的分布をまとめて整理する。

s \emptyset : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・平南	swe / ?swe : 濟州・全南・慶南・慶北・忠北・京畿・江原
se / ?se : 全南・慶南・黄海	swe ϵ / ?swe ϵ : 慶北・平北
se ϵ / ?se ϵ : 慶南・慶北	?swi : 慶南
si / ?si : 慶南・慶北	

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州 : we	慶北 : ϵ , i, we, we	江原 : \emptyset , we	平南 : \emptyset
全南 : \emptyset , e, we	忠南 : \emptyset	黄海 : \emptyset , e	平北 : we
全北 : \emptyset	忠北 : \emptyset , we	咸南 : \emptyset	
慶南 : e, ϵ , i, we, wi	京畿 : \emptyset , we	咸北 : (記録なし)	

¹¹ この項目は小倉進平(1944 下)論末に言語地図が、小倉進平(1944 下:26-28)にその解釈が示されている。

¹² この項目は福井玲(2017)に言語地図とその解釈が示されている。

(3) 誦んずる

小倉進平 (1944 上: 377) には 11 種の語形が記録される。これらは øn-da 系 (øn-da, wen-da, uin-da (=win-da)) と ø-un-da 系 (ø-un-da, e-un-da, e-an-da, ε-un-da, i-un-da, o-un-da, we-un-da, ui-an-da (=wi-an-da)) に分類できる。第 1 音節母音の地理的分布を整理する。

ø : 全南・全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄 海・咸南	i : 慶北
e : 濟州・慶南・江原	we : 濟州・慶南・慶北・忠北
ε : 慶南	wi : 慶南・忠北
	o : 慶南・慶北

地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州 : e, we	慶北 : i, we, o	江原 : ø, e	平南 : (記録なし)
全南 : ø	忠南 : ø	黄海 : ø, e	平北 : (記録なし)
全北 : ø	忠北 : ø, we, wi	咸南 : ø	
慶南 : e, ε, we, wi, o	京畿 : ø	咸北 : (記録なし)	

(4) 回答

小倉進平 (1944 上: 513–514) には 8 種の語形が記録される。これらは hø-dap とその変種 (he-dap, he-dap, hi-dap, hwe-dap, hwe-dap, hui-dap (=hwi-dap), hjo-dap) から成る。第 1 音節の地理的分布を整理する。

hø : 全南・全北・慶北・忠南・忠北・京畿・江 原・黄海・咸南・咸北・平南	hi : 慶南・慶北
he : 濟州・全南・慶南・慶北・忠南・忠北・黄 海・咸北	hwe : 慶南・慶北・忠北・京畿・江原・咸南・ 咸北
he : 全南・慶南・慶北・咸南・咸北・平南・平 北	hwe : 慶南・慶北・咸北・平南・平北
	hwi : 慶南・慶北
	hjo : 全南・全北

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州 : e	慶北 : ø, e, ε, i, we, we,	京畿 : ø, we	咸北 : ø, e, ε, we, we
全南 : ø, e, ε, jo	wi	江原 : ø, we	平南 : ø, ε, we
全北 : ø, jo	忠南 : ø, e	黄海 : ø, e	平北 : ε, we
慶南 : e, ε, i, we, we, wi	忠北 : ø, e, we	咸南 : ø, ε, we	

(5) 麻布¹³

小倉進平 (1944 上: 151–152) には 5 種の語形が記録される。これらは pø とその変種 (pe, pe, pi, pue (=pwe)) から成る。第 1 音節の地理的分布を整理すると以下のとおりである。

pø : 黄海・咸南・咸北	pe : 全南・全北・慶南・慶北・黄海・咸南・咸 北・平南・平北
pe : 濟州・全南・全北・慶南・慶北・忠南・忠 北・京畿・江原・黄海・咸南・咸北	pi : 慶南・慶北

¹³ この項目は岩井亮雄 (2017b) に言語地図とその解釈が示されている。

pwe : 咸北

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

济州 : e	慶北 : e, ε, i	江原 : e	平南 : ε
全南 : e, ε	忠南 : e	黄海 : ø, e, ε	平北 : ε
全北 : e, ε	忠北 : e	咸南 : ø, e, ε	
慶南 : e, ε, i	京畿 : e	咸北 : ø, e, ε, we	

(6) 山・墓

小倉進平 (1944 上: 35-36) には 14 種の語形が記録される。これらは mø 系 (mo-i, mø, mø-ʔtoŋ, me, met, me-ʔtoŋ, me-ʔtoŋ, mε, met, mε-ʔtoŋ, mε-ʔtoŋ, mi) と ʔkak-kim 系 (kak-kim, ʔkak-kim) に分類できる。このうち mø 系の第 1 音節の地理的分布を整理する。

mo-i : 忠南・忠北	海・平北
mø : 全北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・平南	mε : 全南・慶南
me : 济州・全南・全北・慶南・京畿・江原・黄	mi : 慶南・慶北・忠北・江原・黄海

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

济州 : e	慶北 : i	江原 : ø, e, i	平南 : ø
全南 : e, ε	忠南 : o-i, ø, i	黄海 : ø, e, i	平北 : e
全北 : ø, e	忠北 : o-i, ø	咸南 : ø	
慶南 : e, ε, i	京畿 : ø, e	咸北 : (記録なし)	

(7) 黄瓜 (きうり) ¹⁴

小倉進平 (1944 上: 203-204) には 15 種の語形が記録される。これらは o-i 系 (o-i, u-i, ø, e, ε, i, we, we, ui (=wi)) と o-i 系の語頭に mul (水) が付いた mu-rø 系 (mu-rø, mu-re, mu-re, mu-ri, mu-rwe, mu-rui (=mu-rwi)) に分類できる。前者は語頭に、後者は語末 (第 2 音節) に ø とその変種が現れるが、ø とその変種の地理的分布は概ね一致するので地理的分布をまとめて整理する。

o-i : 忠南・忠北・京畿・黄海・咸南・平北	i : 慶南・慶北・忠北
u-i : 忠南	we : 济州・全南・慶南・慶北・忠北・江原・咸南・咸北
ø : 全南・全北・忠南・忠北・江原・咸南	we : 慶南・慶北・咸北・平北
e : 慶南・咸北	wi : 慶南・慶北・江原
ε : 慶南・咸南・咸北	

地域別に整理すると以下のとおりである。

济州 : we	慶北 : i, we, we, wi	江原 : ø, we, wi	平南 : (記録なし)
全南 : ø, we	忠南 : o-i, u-i, ø	黄海 : o-i	平北 : o-i, we
全北 : ø	忠北 : o-i, ø, i, we	咸南 : o-i, ø, ε, we	
慶南 : e, ε, i, we, we, wi	京畿 : o-i	咸北 : e, ε, we, we	

¹⁴ この項目は李翊燮外 (2008: 70-71) に言語地図 (韓国のみ) とその解釈が示されている。

(1-4) は中世語でも現代語でも綴りが oi (ㅝ) である典型的な項目である。 \emptyset が全南, 全北, 忠南, 忠北, 京畿, 江原, 黄海, 咸南, 咸北に見られ, 朝鮮半島を西南から東北に渡って分布する。ただし, (3) を除いて京畿の開城周辺では we や e が見られる。忠南と忠北では \emptyset の他に we や e も見られる。 \emptyset が現れない地域は済州で we と e, 慶南と慶北で (多くの地域で e と ε の区別がないとみて) we (we), e (ε), i, 咸南と咸北で (一部の地域で e と ε の区別がないとみて) we (we) や e (ε), 平南と平北で we や ε が見られる。もともと全道的に \emptyset が分布していたと仮定すれば, 地理的分布からはこれらの地域で $\emptyset > we$ (we, e, ε) (慶南と慶北ではさらに $> wi$ (i)) のような音変化を経たことを示す。平南や平北では他の地域と異なり (非円唇前舌) 半広母音が見れるのが興味深い。これは以下の (5) の考察で議論する。(1-12) を通して済州では決して \emptyset が見られない点も注目される。これは済州の母音体系と関わる問題として別稿で扱われるべきだろう。

(5-6) は現代語では oi (ㅝ) と綴ることは稀であり, 中世語から現代語にかけて典型的には oi (ㅝ) $>$ e (ㅜ) のような変化を経た項目である。このような項目は, 既によく知られているように, oi (ㅝ) の頭子音が両唇音であるのが特徴である。(6-7) は (1-5) の語形には見られない o-i のような母音を含む語形が記録された項目である。これは (6-7) が中世語では上声であったことによるものである。以下, (5-7) について考察する。

(5) は poi (ㅝ) $>$ pe (ㅝ) のような変化を経たと考えられる。二重母音が一地点を除き見れないのは頭子音の両唇音によるものだろう。(1-4) に比べて e が全道的に分布するのが特徴である。全南, 全北, 慶南, 慶北の多くの地域では e と ε の区別がなくなっており, その場合は ε で記録していると考えられるが, 平南, 平北では (1-4) と同じく (前舌非円唇) 半広母音の ε が現れるのが注目される。即ち, (1-5) は多くの地域で oi (ㅝ) $>$ we (e) のように変化したと考えられるのとは対照的に平南や平北は oi (ㅝ) $>$ we (ε) のように半広母音に変化している。このことと関連して岩井亮雄 (2017a) では若年層ソウル方言話者 (2015 年時点で 10 代後半の話者 6 人) が発音した単母音を用いて聴取実験を行ない, 韓国各地方の韓国語話者 (2016 年時点で平均 33 歳の話者 11 人) は e も ε もどちらも概ね五分五分の割合で e と ε で聴取するが, 延辺朝鮮語話者 (2016 年時点で平均 31 歳の話者 9 人) は e と ε を ε で聴取する傾向が強いことを示した。平北で oi (ㅝ) が we や ε に変化していることと岩井亮雄 (2017a) の聴取実験の結果は通ずるところがあり興味深い。

(6) は moi (ㅝ) $>$ me (ㅝ) のような変化を経たと考えられる。二重母音が見れないのは (5) と同じく頭子音の両唇音によるものだろう。 \emptyset の分布域は (1-4) より狭く, 代わりに e が見られるのは (5) に類似する。忠南と忠北の mo-i は中世語の発音の名残を反映した, 地域的な特徴である。慶南と慶北では me の前舌化により mi が広く分布している。平北では, (1-5) で半広母音 ε が見られたのとは対照的に, 半狭母音 e が見られる。兪弼在 (2006: 207) では (中部方言の変化 (oi (ㅝ) $>$ e (ㅜ))) とは異なり) 六鎮方言では (1-4) のような変化 (oi (ㅝ) $>$ we) を経たが, 両唇音の後で (5) や mois-to-ki (뫓도기) $>$ me-ttu-ki (매뚜기) のような変化 (oi (ㅝ) $>$ ε (ㅜ)) が観察されるので六鎮方言の oi (ㅝ) $>$ ε (ㅜ) の変化は w 脱落による

と説明する。(6)はこの説明やこの地域での(1-5)の分布の例外と考えられる。しかし、見方を変えると、他の地域ではoi(ㅅ) > e(ㅅ)の変化が一般的であり、この変化と同じである。先述のとおり(6)は慶南と慶北でmeの前舌化によりmiが広く分布する点が(1-5)と対照的であり、(6)の変化の時期や速さが(1-5)よりも速いと考えることもできる。

(7)は現代語ではo-i(오이)と綴られるようになった項目である。(6)同様、中世語の発音の名残によりo-iが見られるが、分布域は(6)よりも広い。忠南にはu-iが見られるが、これは第2音節以下でのo > uの変化やmu-rui(=mu-rwi)から語頭のmul(水)が脱落したことなどによるものだろう。o-iが見られる地域以外は(1-4)の地理的分布と概ね一致する。

2.2 前舌母音化に関わる調査項目

本節では「肉魚」「蕎麦」「尖れるさま」の3項目を考察する。前舌母音化が関与する項目である。「蕎麦」「尖れるさま」は頭子音が両唇音であることが特徴である。

(8) 肉魚

小倉進平(1944上:162-163)には11種の語形が記録される。これらはko-gi系(ko-gi, ko-i-gi, kə-gi, ke-gi, kε-gi, ki-gi, kwe-gi, kwi-gi)とpo-si-si-ri系(po-si-si-ri, pə²si-si-ri)に分類できる。ko-gi系の第1音節の地理的分布を整理する。

ko: 全南・慶南・慶北・忠北・江原・黄海・咸北・平南・平北	kε: 慶南・慶北・咸南
ko-i: 忠南	ki: 慶南・慶北
kə: 全南・全北・忠南・忠北・京畿・黄海・咸南・咸北	kwe: 濟州・全南・慶北・忠北・咸北
ke: 慶南・黄海	kwe: 濟州・慶北
	kwi: 慶北

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州: we, wε	慶北: ε, i, we, wε, wi, o	江原: o	平南: o
全南: ə, we, o	忠南: o-i, ə	黄海: ə, e, o	平北: o
全北: ə	忠北: ə, we, o	咸南: ə, ε	
慶南: e, ε, i, o	京畿: ə	咸北: ə, we, o	

(9) 蕎麦

小倉進平(1944上:201-202)には9種の語形が記録される。これらはme-milとその変種(mə-mil, mə-mul, mɔ:l, me-mul, mε-mil, mε-mul, mɛ:l, mi-mul)から成る。第1音節の地理的分布を整理する。

mə: 京畿・黄海・咸南	mε: 全南・全北・慶南・慶北・江原・咸南・咸北
me: 全南・全北・慶南・慶北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海	mi: 慶南・慶北

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州：(記録なし)	慶北：e, ϵ , i	江原：e, ϵ	平南：(記録なし)
全南：e, ϵ	忠南：e	黄海： \emptyset , e	平北：(記録なし)
全北：e, ϵ	忠北：e	咸南： \emptyset , ϵ	
慶南：e, ϵ , i	京畿： \emptyset , e	咸北： ϵ	

(10) 突れるさま

小倉進平(1944 上: 486-487)には22種の語形が記録される。これらは po-dzok 系 (po-dzok , po-dzok) と pjo-dzok 系 (pjo-dzok , pjo-dzok) と tjot-pit 系 (tjet-pit , tjet-pit) に分類できる。このうち po-dzok 系と pjo-dzok 系の第1音節の地理的分布を整理する。

po ：濟州・慶南・咸南・平北	pe ：慶南・慶北・咸南
pø ：全南・全北・咸南・平南・平北	pi ：慶南・慶北
pe ：全南・全北・慶南・忠南・忠北・江原	pjo ：京畿・黄海

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州： \emptyset	慶北： ϵ , i	江原：e	平南： \emptyset
全南： \emptyset , e	忠南：e	黄海：jo	平北： \emptyset , o
全北： \emptyset , e	忠北：e	咸南： \emptyset , ϵ , o	
慶南：e, ϵ , i, o	京畿：jo	咸北：(記録なし)	

(8) は ko-ki (고기) > koi-ki (괴기), (9) は mo-mil (모밀) > moi-mil (뫼밀), (10) は表記の一例として spo-cjok (쑈족) > spoi-cjok (쑈족) のような変化を経たと考えられる語形が見られる¹⁵。(8)の現在の標準語は ko-ki (고기) であるが、小倉進平のデータも示すように前舌母音化した koi-ki (괴기) を使う地域も多い。(9)の現在の標準語は me-mil (메밀) であるが、中世語の語形は mo-mil (모밀) であり、前舌母音化によって mo-mil (모밀) > moi-mil (뫼밀) の変化を経たのちに (5-6) のように moi-mil (뫼밀) > me-mil (메밀) の変化を経たと考えられる。(10)の現在の標準語は ppjo-cok (뽕족) であるが、中世語の語形は spo-cjok (쑈족) であり、19世紀文献から spjo-cjok (쑈족) や spjo-cok (쑈족) が確認されるようになる。

(8-10) は (1-7) と異なり母音 \emptyset が見られる地域がある¹⁶。 \emptyset が見られる地域は項目ごとに若干違うが、前舌母音化が起こりにくい地域といえるだろう。 \emptyset の分布域は (8) は (1-4) と、(9) は (5) と、(10) は (6-7) と概ね一致し、 \emptyset 以外に we (we), e (e), i が見られる点も

¹⁵ ただし、moi-mil (뫼밀) と spoi-cjok (쑈족) や ppoi-cjok (뽕족), spoi-cok (쑈족) ppoi-cok (뽕족) といった語形を筆者は文献上で確認できていない。

¹⁶ (9)には母音 \emptyset が現れる地域はないが、小倉進平のデータには記録されていない平南と平北に mo-mil (모밀) が現れる(崔鶴根(1978)による)。崔鶴根(1978)のデータは1955-1976年度に調査されたものであり、調査時期は小倉進平のデータが調査された1910-1930年代よりも数十年を経たものであるが、小倉進平のデータの被調査者が主に普通学校の学生であったことから、被調査者の世代は概ね一致するといえるかもしれない。

(1-7) と合致する。特に (9) の母音の地理的分布は同じく頭子音が両唇音の (5) と酷似する。これら以外の母音の分布の特徴として (8) は忠南に o-i が見られるが、これは (6-7) で o-i が見られた地域と一致する。(10) は現在の標準語である ppjo-cok (翌忝) の母音 jo が京畿と黄海に見られる。この変化の過程を解釈するのは難しいが、ppjo-cok (翌忝) が京畿や黄海から生じた語形であることを小倉進平のデータは示しており、興味深い。

2.3 jo の変種として ø が現れる調査項目

本節では漢字音中の jo の変種として ø が現れる「学校」と「票」の2項目を考察する。

(11) 学校

小倉進平 (1944 上: 134) には4種の語形が記録される。これらは hak-kjo とその変種 (hek-ko, hak-kø, hek-ke) から成る¹⁷。第2音節の地理的分布を整理する。

kjo : 多くの地方 ¹⁸	ko : 全南・全北・慶南・慶北・江原・咸南・咸北・平南・平北
kø : 全南・全北・忠北・江原・黄海・咸南・咸北	ke : 全南・慶南・慶北・江原

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

全南 : ø, o, ε	慶北 : o, ε	黄海 : ø	平南 : o
全北 : ø, o	忠北 : ø	咸南 : ø, o	平北 : o
慶南 : o, ε	江原 : ø, o, ε	咸北 : ø, o	多く : jo

(12) 票

小倉進平 (1944 上: 260-261) には5種の語形が記録される。これらは p^hjo とその変種 (p^hø, p^he, p^hε) から成る。第1音節の地理的分布を整理する。

p ^h jo : 濟州・全南・全北・慶北・忠南・忠北・京畿・江原・黄海・咸南・咸北・平南・平北	p ^h e : 濟州・全南・忠南・忠北・江原・咸北
p ^h ø : 全南・全北・忠南・忠北・江原・黄海・咸南・咸北・平南・平北	p ^h ε : 濟州・平南

母音に注目して地域別に整理すると以下のとおりである。

濟州 : e, ε, jo	慶北 : o, jo	江原 : ø, e, o, jo	平南 : ø, ε, jo
全南 : ø, e, jo	忠南 : ø, e, jo	黄海 : ø, jo	平北 : ø, o, jo
全北 : ø, jo	忠北 : ø, e, jo	咸南 : ø, o, jo	
慶南 : o	京畿 : jo	咸北 : ø, e, o, jo	

(11) の「校」の代表音は kio^R であり、伊藤智ゆき (2007) には (12) の「票」は見出し語に

¹⁷ 本来は hak-^hkjo や hek-^hko, hak-^hkø, hek-^hke のように第2音節頭子音は濃音 ^h で記録されるべきであろう。

¹⁸ 小倉進平 (1944 上) では「多くの地方」とだけ記録されていて具体的な地名は記されていない。崔鶴根 (1978) では全北, 慶南, 慶北, 忠南, 忠北, 江原にこの語形 (hak-kjo または hak-^hkjo) が分布する。

ないが、「漂」「瓢」などの代表音は $\text{p}^{\text{h}}\text{i}\text{o}^{\text{L}}$ 、「標」「剽」などは $\text{p}^{\text{h}}\text{i}\text{o}^{\text{H}}$ である（伊藤智ゆき（2007）による）。 kjo や $\text{p}^{\text{h}}\text{j}\text{o}$ の jo の変種として \emptyset , o , e , ε が現れるが、これは漢字音の地域差という点からも重要な項目といえるかもしれない。ただし、これらの母音が jo の変種として現れるに至った過程については解釈が難しい¹⁹。 jo が多くの地域で見られるのに対し、 \emptyset は全南、全北、忠南、忠北、江原、咸南、咸北（(12) はさらに平南、平北）に、 o は慶南、慶北、咸南、咸北、平南、平北（(11) はさらに全南、全北）に、 e や ε は散発的に jo , \emptyset , o の併用系として現れる。 \emptyset の分布域は（1-4）と概ね一致する。 o の分布域は現代語で 2.2 節のような前舌母音化が生じにくい地域と概ね一致しているといえるかもしれない。（12）では jo と \emptyset , o と \emptyset の併用が見られる地域もある。

3 おわりに

小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載の方言資料を後進研究者が十分に活用していないことを顧み、かつ oi (ㅟ) の音変化を考察する上で重要な材料となる当時の \emptyset の方言音声を全道的・網羅的に検討した研究が限定的であることを背景に、 \emptyset の音色の地域差を検討した。

まず、中世語でも現代語でも綴りは oi (ㅟ) のままであるが、現代語では oi (ㅟ) を \emptyset や we で発音する音節を含む「外」「鐵・金」「誦んずる」「回答」では \emptyset が朝鮮半島西南部から東北部に、 we や e (e と ε を区別しないと考えられる地域を含む) が京畿道開城周辺、濟州島、慶尚道、忠清道、咸鏡道に、 wi や i が慶尚道に、 we や ε が平安道に見られた。これらは開城周辺で $\emptyset > \text{we}$ 、濟州島、慶尚道、忠清道、咸鏡道で \emptyset または oi または $\text{oj} > \text{we}$ (e)、慶尚道はさらに we (e) $>$ wi (i) に、平安道で \emptyset または oi または $\text{oj} > \text{we}$ (e) のような変化を示唆すると考えられる。次に、頭子音が両唇音で、中世語から現代語にかけて oi (ㅟ) $>$ e (ㅓ) の変化を経た「麻布」「山・墓」「蕎麦」の \emptyset の分布域は、項目ごとに程度の差はあるが、「外」「鐵・金」「誦んずる」「回答」よりは狭い。代わりに「麻布」「蕎麦」は全道的に e (e と ε を区別しないと考えられる地域を含む) が分布し、 i が慶尚道に見られた。また、「山・墓」「黄瓜」では oi (ㅟ) が忠清道（「黄瓜」はさらに半島中央部）で o-i のように単母音化を拒否して現れた。これは中世語で oi (ㅟ) の声調が上声であったことによると考えられる。この他、 o (ㅜ) $>$ oi (ㅟ) のような前舌母音化に関わる「肉魚」「蕎麦」「尖れるさま」、漢字音中の jo の変種として \emptyset が現れる「学校」「票」も検討し、これらの \emptyset の分布域は少なくとも「外」「鐵・金」「誦んずる」「回答」などに概ね一致することを示した。

小倉進平著『朝鮮語方言の研究』所載資料を積極的に活用した研究には言語地図化を試みた中井精一（1997）や言語地図化とその解釈を行なった福井玲編（2017）などがある。もちろん如何なる単語も自身の歴史を持っており小倉進平（1944）所載資料の調査項目をひとつひとつ解釈する作業が先行されるべきであるが、本稿では幾つかの調査項目を整理することを通じて

¹⁹ $\text{jo} > \emptyset$ の変化に関して、崔銓承（1986: 179-188）は j 添加により $\text{jo} > \text{joj} > \text{jo} > \emptyset$ のような解釈を示すのに対し、白斗鉉（1992: 170-173）は倒置により $\text{jo} > \text{oj} > \emptyset$ のような解釈を示す。

ø の音色の地域差の全体像を捉えようと試みた。本稿のこうした試みはこの方言資料の活用例として意義があるだろう。ø 以外の方言音声や音韻史に関する問題にこの方言資料を積極的に活用することが今後の課題となる。平安道で oi (ㅟ) が半広母音 ε として現れるなど、oi (ㅟ) の音変化の地域差を本稿では示したが、この方言資料を活用すれば音変化の方向性の地域差について幾つかの重要な知見を得られるかもしれない。

参考文献

- 伊藤智ゆき (2007) 『朝鮮漢字音研究 資料篇』東京：汲古書院。
- 岩井亮雄 (2017a) 「韓国語ソウル方言単母音の変化の方向性と聴取判断の様相—/ㅟ/と/ㅟ/の合流と/ㅟ/と/ㅟ/の接近を中心に—」『朝鮮学報』242: 47-77. 朝鮮学会。
- 岩井亮雄 (2017b) 「麻布」福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 53-56. 東京大学韓国朝鮮文化研究室。
- 小倉進平 (1931) 「朝鮮語母音の記号表記法について」『音声の研究』4: 139-149. 日本音声学会。
- 小倉進平 (1944) 『朝鮮語方言の研究』上下2巻. 東京：岩波書店。
- 中井精一 (1997) 『朝鮮半島言語地図』平成18年度科学研究費(基盤研究(B)(1))日本海沿岸社会の地域特性と言語に関する類型論的研究。
- 福井玲 (2016) 「小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—」『東京大学言語学論集』37: 41-70. 東京大学言語学研究室。
- 福井玲 (2017) 「鉄・金(かね)」福井玲編『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1: 89-92. 東京大学韓国朝鮮文化研究室。
- 福井玲編 (2017) 『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈』1. 東京大学韓国朝鮮文化研究室. 公開ウェブページ：<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/OguraProject.html> (2017年7月20日現在)。
- 金鳳國 (2006) 「개화기 이후 국어의 ‘위, 외’ 음가와 그 변화 (開化期以降国語の ui, oi の音価とその変化)」『李秉根先生退任記念国語学論叢』155-191. ソウル：太学社。(鄭承喆・鄭仁浩共編 (2010: 329-363) に再録)
- 白斗鉉 (1992) 『嶺南 文献語의 音韻史 研究 (嶺南文献語の音韻史研究)』ソウル：太学社。
- 俞弼在 (2006) 「양순음 뒤 ‘ㅟ>ㅟ’, ‘ㅟ>ㅣ’ 변화에 대하여 (兩唇音後の oi > e, ui > i の変化について)」『李秉根先生退任記念国語学論叢』193-209. ソウル：太学社。(鄭承喆・鄭仁浩共編 (2010: 385-400) に再録)
- 李翊燮・田光鉉・李光鎬・李秉根・崔明玉 (2008) 『韓国言語地図』ソウル：太学社。
- 鄭承喆・鄭仁浩共編 (2010) 『二重母音』ソウル：太学社。
- 鄭仁浩 (2013) 「하강이중모음 ‘외’의 變化와 方言 分化 (下降二重母音 oi の変化と方言分化)」『方言学』18: 147-170. 韓国方言学会。
- Jo, A-ram (2014) 「20세기 초 유성기 음반으로 본 모음 ‘ㅟ, ㅟ’의 발음에 대하여 (20世紀初頭の蓄音機音盤で見た母音 oi, ui の発音について)」『津橋語文研究』38: 194-225. 津橋語

文研究会.

車載銀 (2007) 「20 세기 초의 한국어 모음 체계—1930 년대의 음성 자료를 중심으로— (20 世紀初頭の韓国語母音体系—1930 年代の音声資料を中心に—)」『韓国語学』 37: 361–396. 韓国語学会.

Choe, Seong-gyu (2013) 「남북한 방언에 나타난 ‘oi, ui’의 변화 (南北間方言に現れた oi, ui の変化)」『方言学』 18: 171–194. 韓国方言学会.

崔銓承 (1986) 『19 세기 후기 全羅方言의 음운현상과 그 역사성 (19 世紀後期全羅方言の音韻現象とその歴史性)』ソウル: 翰信文化社.

崔鶴根 (1978) 『韓国方言辞典』ソウル: 玄文社.

韓成愚 (2005) 「『普通学校 朝鮮語讀本』音声資料에 대한 음운론적 연구 (『普通学校朝鮮語讀本』音声資料についての音韻論的研究)」『語文研究』 33-3: 29–58. 韓国語文教育研究会.

Regional Characteristics of the Vowel / ø / in Korean: Illustrating the Dialectal Data *Chōsengo Hōgen no Kenkyū* by Ogura Shinpei

IWAI, Ryota

Keyword: Korean language, vowel / ø /, regional or dialectal characteristic, Ogura Shinpei, linguistic map

Abstract

The aim of this paper is to analyze regional or dialectal characteristics of the vowel / ø / in the Korean language, making the best use of the data contained in *Chōsengo hōgen no kenkyū* (studies in the Korean dialects) by Ogura Shinpei in 1944. This study mainly discusses a group of words which included the letter *oi* in Late Middle Korean. These analyses serve to illustrate how to apply his data of dialectal surveys.

(いわい・りょうた 韓国朝鮮文化研究専攻博士課程)